

## 2013 年度春学期 応用数学（解析） 第 6 回

### 第 2 部・基本的な微分方程式 / 変数分離形の変形

前回は、変数分離形の微分方程式と、それを積分によって解く方法を説明しました。このように、常微分方程式の解を積分によって求める方法を**求積法**といいます。今回は、式変形によって変数分離形に帰着し、求積法で解ける形の方程式を紹介します。

#### 同次形の微分方程式

関数  $x(t)$  についての**同次形**の微分方程式とは、次の形のものをいいます。

$$\frac{dx}{dt} = f\left(\frac{x}{t}\right). \quad (1)$$

この方程式は、 $\frac{x}{t} = u$  とおくと  $x = ut$  ですから、 $\frac{dx}{dt} = t \frac{du}{dt} + u$  となり、

$$\begin{aligned} t \frac{du}{dt} + u &= f(u) \\ \frac{1}{f(u) - u} du &= \frac{1}{t} dt \end{aligned} \quad (2)$$

と変数分離形に変形できます。

ところで、関数  $M(x, t)$  が  $M(ut, t) = t^k M(u, 1)$  となる時、関数  $M$  は  $k$  次の**同次関数**であるといいます。関数  $x(t)$  についての微分方程式が  $\frac{dx}{dt} = \frac{M(x, t)}{N(x, t)}$  と表される時、もしも  $M, N$  が 同じ  $k$  次の同次関数なら、 $x = ut$  とすると

$$\begin{aligned} \frac{dx}{dt} &= \frac{M(x, t)}{N(x, t)} \\ &= \frac{t^k M(u, 1)}{t^k N(u, t)} = \frac{M(u, 1)}{N(u, 1)} = \frac{M\left(\frac{x}{t}, 1\right)}{N\left(\frac{x}{t}, 1\right)} \end{aligned} \quad (3)$$

となり、(1) 式の形になります。同次形という名前はここからきています。

#### 例題

関数  $x(t)$  についての微分方程式  $x' = \frac{t-x}{t+x}$  の一般解を求めてください。

(解答) 右辺の分母分子を  $t$  で割ると

$$\frac{dx}{dt} = \frac{1 - \frac{x}{t}}{1 + \frac{x}{t}} \quad (4)$$

となりますから、この方程式は同次形です。そこで  $\frac{x}{t} = u$  とおくと  $\frac{dx}{dt} = t \frac{du}{dt} + u$  となり、与えられた方程式は

$$\begin{aligned} t \frac{du}{dt} + u &= \frac{1-u}{1+u} \\ \frac{1}{\frac{1-u}{1+u} - u} du &= \frac{1}{t} dt \\ \frac{u+1}{u^2+2u-1} du &= -\frac{1}{t} dt \end{aligned} \quad (5)$$

という変数分離形になります。ここで  $\frac{d}{du}(u^2 + 2u - 1) = 2(u + 1)$  ですから、(5) 式の両辺を積分すると、 $C$  を積分定数として

$$\frac{1}{2} \log(|u^2 + 2u - 1|) = -\log |t| + C \quad (6)$$

となります。よって、別の定数  $A$  を使って

$$\begin{aligned} \log(|u^2 + 2u - 1|) &= \log(A|t|^{-2}) \\ t^2(u^2 + 2u - 1) &= A \end{aligned} \quad (7)$$

とあらわすことができます<sup>1</sup>。  $u = \frac{x}{t}$  ですからこれを代入すると、この方程式の解は  $x^2 + 2tx - t^2 = A$  となります。 ■

## 1 階線形微分方程式

関数  $x(t)$  についての 1 階微分方程式が

$$\frac{dx}{dt} + P(t)x = Q(t) \quad (8)$$

の形に書けるとき、この方程式を **1 階線形微分方程式** といいます。

この方程式は、 $p(t) = \exp\left(\int P(t)dt\right)$  とおくと、 $(p(t)x)'$  が

$$\begin{aligned} (p(t)x)' &= (p(t))'x + p(t)x' \\ &= \left[ \exp\left(\int P(t)dt\right) \right]' x + p(t)x' \\ &= p(t)P(t)x + p(t)x' \\ &= p(t) \{P(t)x + x'\} = p(t)Q(t) \end{aligned} \quad (9)$$

となることから、 $C$  を積分定数として

$$\begin{aligned} p(t)x &= \int p(t)Q(t)dt + C \\ x &= \frac{1}{p(t)} \left( \int p(t)Q(t)dt + C \right) \end{aligned} \quad (10)$$

と解くことができます。

### 例題

関数  $x(t)$  についての微分方程式  $x' + x = t$  の一般解を求めてください。

(解答) この方程式は 1 階線形微分方程式で、(8) 式にあてはめると  $P(t) \equiv 1$ 、 $Q(t) = t$  です。よつ

<sup>1</sup>定数には適宜  $\pm$  をつけてよいので、絶対値が外れることに注意してください。

て  $p(t) = \exp(\int 1 dt) = e^t$  で、一般解は (10) 式から、 $C$  を定数として

$$\begin{aligned} e^t x &= \int e^t t dt + C \\ &= e^t t - \int e^t dt + C \\ &= e^t t - e^t + C \\ x &= t - 1 + C e^{-t} \end{aligned} \tag{11}$$

と求められます。■

ところで、 $n \neq 1$  とするとき、関数  $x(t)$  についての

$$\frac{dx}{dt} + P(t)x = Q(t)x^n \tag{12}$$

の形の方程式を **Bernoulli (ベルヌーイ) の微分方程式** といいます。

この方程式は、 $u = x^{1-n}$  とおくと 1 階線形微分方程式に変換することができます。(12) 式から

$$\frac{1}{x} x' + P(t) = Q(t)x^{n-1} \tag{13}$$

となります。一方、 $\log u = (1-n) \log x$  で、両辺をそれぞれ  $t$  で微分すると

$$\frac{u'}{u} = (1-n) \frac{x'}{x} \tag{14}$$

となります。(14) 式を (13) 式に代入すると

$$\begin{aligned} \frac{1}{1-n} \frac{u'}{u} + P(t) &= Q(t) \frac{1}{u} \\ u' + (1-n)P(t)u &= (1-n)Q(t) \end{aligned} \tag{15}$$

となって、 $u(t)$  の 1 階線形微分方程式となります。

## 問題

関数  $x(t)$  についての次の微分方程式を解いて、一般解を求めてください。

1.  $x' = \frac{x-t}{2t}$
2.  $tx' - x = 1$
3.  $x' + x = tx^2$

## 参考文献

水野克彦編, 基礎課程 解析学, 学術図書, 1985. ISBN978-4-8736-11075

水田義弘, 詳解演習 微分積分, サイエンス社, 1998. ISBN4-7819-0891-8